「今日は、私の相手をお願いしても構わないだろうか？」
　風に巻き上げられた砂埃、忙しなく存在感を主張する波、どこからともなく聞こえてくる鳥の声
そんないつも通りを表す自然の合唱をかき消す声が、夏凜と晴海の間に割り込む
どこに隠れていたのか、姿を見せた声の主は、乃木若葉
天乃の精霊であり、元、西暦時代の勇者である若葉は、常備している太刀の柄に手をかけて、晴海へと目を向ける
「貴女は手強いと聞いた。ぜひ、手合わせ願いたい」
「その前に、名前は？　私は久遠晴海。夏凜ちゃんの戦技教導官よ」
「すまない。私は乃木若葉。乃木家の西暦時代、勇者をさせて貰っていた者だ」
　二人の挨拶は軽く、晴海は嬉しそうに薄く笑みを浮かべると、夏凜へと目を向けて「ごめんね」と、小さく謝った。夏凜の相手をすることに苦は無い
しかし、たまには別の相手もして見たいのだ。それが、西暦時代の勇者というのなら、なおさら
「若葉ちゃん。で良い？」
「では、私は……そうだな。晴海教導官。で、良いだろうか」
「うん、良いよ。好きに呼んで。ハンデはいる？」
「初戦にハンデなんてつけるわけがない」
　久遠晴海、夏凜の教導官にして、天乃の姉、高校生
しかし、その実力は聞いているだけなら鼻で笑いたくなるようなものだった
勇者であり、鍛錬を積んでいるはずの夏凜を持ってしてもいまだに勝ち目が無いと言わしめるほど。若葉自身、そんな馬鹿なことがあるわけが無いと疑念を抱いてはいたが、自分が勇者だと知ったときの余裕、その瞳に見つめられたときの背筋を撫でた悪寒が、現実のものとしていく
　若葉にあるのは九尾から与えられた記憶、しかし、それでも数々の戦いを経てきた記憶や経験は体に染み付いており、天乃の精霊として、以前よりも戦闘力は向上しているはずだと、若葉は思う
しかし……
（なんだ。なんなんだ……この底知れない不穏な感覚、まるで、バーテックスの集合体目の前で積み上げられていったあのときのような……）
　ごくりと、若葉は息を呑み、夏凜と場所を入れ替わって、刀の柄に手をかける。握る手には、汗がじっとりと浮かぶ。下手をすれば取りこぼしてしまいそうな、すっぽ抜けてしまいそうな、そんな幼稚な失態を見せてしまいそうな……緊張感
実際に対面してこそ伝わるそれに、若葉は引いてしまいそうな足を無理矢理に前へと進ませる

「先攻はどうぞ」
「その言葉……後悔させたいな」
余裕を見せる晴海に対して、若葉は精一杯挑発するような口ぶりで述べると、小さく息を吐き、大きく吸い込んで、目を閉じる
そんな無駄な行動はするべきではない、隙だらけではないか。そう言われること、先手を打たれること、そんな警戒もしたが、それは杞憂に終わった
「すぅ……」
微かに感じる潮の香り、肌を撫でる風がまるで飛散する蜘蛛の糸のように肌に張り付く。なのに、波の音は全く聞こえなかった。自分の静かな息遣い、晴海の踏み込む砂粒の擦れる音、そして、晴海の息遣い。研ぎ澄まされた感覚が集音するそれに神経を傾け、歯を噛み締める
（解ってはいたが……隙がない。余裕は王者の表れ。なんだあれは、砲台の壁に包まれた何かのようだぞ）
隙だらけだが、隙がない。そんな絶対守護防壁が張り巡らされていそうなあの距離に、自分は行かねばならぬのだと、若葉は心を強くし、息を吐く
――そして
「ふ――っ！」
砂の足場を踏み抜き、距離をつめて鞘を左手で固定し右手で柄を握る。晴海と若葉の距離は数十センチ。互いの刀の間合いに入った瞬間、若葉はギャリギャリと刀の悲鳴を聞きながら抜刀
「せやァッ！！！」
陽の光を受けて煌いた刀は風を切り裂き、晴海へと迫って……甲高い金属音が響く
抜刀した若葉の刀は弾き飛ばされることこそなかったが、後方へと弾かれて晴海の刀があざ笑うように方向を切り替える
「くっ！」
弾き飛ばされ、後方へと引きずり込もうとする引力に任せて体をのけぞらせると、若葉の鼻先を切っ先が掠めていく。
（躱し――っ）
宙に浮かんだままの体、その腹部に重く固い衝撃がゆっくりと衝突していく感覚。自分の腹から何かが伸びている。いや、自分の腹部に向かって何かが伸びた
それが晴海の足であるのと理解した瞬間には、内臓から押し上げられた異物に突き飛ばされた空気が口から飛び出していく
「かは――っあっ！？」
駆け込んだ酸素が駆け出していくのと同時に、若葉と晴海の間隔は一瞬にして開き、若葉の死角に移る晴海は遠く、傾き、そして、どさりと、鈍い痛みが地面と衝突した右半身を痺れさせる

「なっ……くっ、かふっ」
ズキズキと痛む腹部に手を宛がいながら、若葉はゆっくりと体を起こす。ふらつく足はもはや限界なのかと若葉の脳裏をよぎるが――ヒュンッっという音に反射的に出した刀が強く振るえ、砕けないことが奇跡だと言いたげな鈍痛が腕へと忍ぶ
そしてまた、一撃。激しい金属音、そしてまた、一撃。迸る火花がチカチカと視界で瞬く
「あなたの力はこの程度じゃないはずよ。先代勇者！」
「ぐっ……このっ！」
防御と攻撃の合間、ほんの一瞬の隙に攻撃へと転じた若葉は、腹部に燻る鈍い痛みを噛み潰して地面を踏み込み、肉薄すると、晴海の体に肩を押し当てて突き飛ばし、半転
そのまま抜き身の刀を振りぬく
「っは……はっ……はっ、んっ」
攻撃はあたりこそしなかったが、晴海が距離を取ったのを見て乱れた呼吸を整え、腹をひと撫でする。もう少し頑張れ。と
「よ、ようやく、体が温まってきたところだ」
「あら、そう？ なら楽しみね」
まだ、記憶の中にしかない激戦の感覚は完全には戻ってきていない。精霊として召喚されてから何度か戦いへと参加はしたが、そのときはまだ、体の記憶しかなかった。その齟齬を埋めたいと、若葉は思った。だから、若葉は吐き出させられた唾液の伝う口元を拭って、笑みを浮かべる
「ここからが、私の時間だ」
刀を一度鞘へと納めて、足幅を広く、左手と右手の力を少しずつ抜いていく。刀を振るうのは力ではない。力で振るう剣術など、術ではないし技でもない。ただの暴力だ。もう一度感覚を研ぎ澄ませて、晴海のみをその視界に収めていく
「すぅ……」
ずきりとする内臓の痛み、だが、それでも若葉は集中力を高めて、足の力を込めていく。攻撃を当てられないなんて事はないはずなのだ。どこかに僅か数瞬だとして隙があるはずだ。そこを――狙う！
初手よりもずっとはやく、相手が生身の人間であるなどという配慮を捨てて、特攻。防御も攻撃も考えない、ただ疾走のみに全力をかけて距離をつめ、間合いに入った瞬間に軸足を踏みしめて横に飛ぶ
「！」
刹那に振り下ろされた刀が若葉の影を切り裂く、靡いた髪のいくつかを切り落とす。だが、若葉は油断をせずさらに姿勢を低くする。真上を刀が通り過ぎた風斬りの音を捉えるのと同時にかかとを浮かせ、つま先に力を込め突貫
「喰らうものか！」
「っ！」

女学生らしからぬ速度で振り返してきた刀を切り払い、若葉は柄で晴海の胸部を打ち、即座に逆手持ちへと切り替え、斜め下から切り上げる――が
「ぐっ！？」
右手の付け根が蹴飛ばされ、斬撃は晴海のすぐ真横を通り抜けていく。それを目で負う余裕は無かった。不味い、と本能の訴えが聞こえるよりも早く若葉は左腕で自分のわき腹を塞ぎ、容赦ない柄の一撃を何とかしのいで、後ろに飛び退く
その間、視界に映った晴海はふわりと髪を靡かせながら半転し、若葉と目が合った瞬間に砂地を蹴り上げ砂塵を巻き上げる
驚いた鳥達の声は、嫌にゆっくりで。背後の公園、その奥の道路を通り過ぎる子供達の声はゆったりとしていて。目の前の悪魔が、刀を納める
（まずいっ！）
浮いた体は回避の余地なく、まともに受けるか防御するかの二択で、若葉は悩むまでもなく防御を選んで刀を構えたが、その瞬間、「――抜刀」という低く静かな声が聞こえたかと思えば、刀が砕け散ったような音が響き、体が吹き飛び、砂地への落下すらなく防波堤へと衝突した若葉は数秒、気を失ってすぐ立ち上がろうとして、倒れこむ
「かはっ……」
あの日、全てが始まったあの場所で。
若葉が経験した絶望の始まりの地で。
友となった者達を失った怒りと、絶望と、悲しみと、嘆き。その全てをぶつけ、払いのけられたあの痛みを、それは想起させる
体が軋む、骨が折れたかのような鈍い痛み、体の熱、力を入れれば場きりと折れてしまいそうな震えが体を揺らす。だが、若葉は刀を地面に突き刺して立ち上がると、折れていないまっすぐな瞳を晴海へと向ける
「まだだ。まだ終わっていないぞ」
体の昂ぶりを感じる。危険な香りさえ漂って来そうな高揚感を感じる。若葉は流れ無い血を拭うように額を拭い、笑みを浮かべる
「……鞘と体術まで使わせた時点で、凄いことなんだけど……ね」
晴海はそう言うと、腰に納めた自分の刀の柄を小突き、抜刀
その刀には、刃が無かった。いや、正しく言えば刃が砕け散っていた
晴海が鞘を少しだけ傾けると、砕け散った破片がぱらぱらと、晴海の手の平に落ちていく
「今日は私が終わりにしたいわ。次はちゃんとした刀を持ってくる。そしたら、思う存分。ね？」
「体術ではやらないのか？」
「若葉ちゃんに必要なのはそっちじゃないし、若葉ちゃんには武器なしハンデはつけてあげる余裕なさそうだから」

「解った」
「ごめんね、水を差しちゃって」
申し訳なさそうに謝罪を述べた晴海は、夏凜へと目を向けると、「だから夏凜ちゃんも今日はなし」と、茶目っ気のある笑みを浮かべて言う。夏凜は少し不服そうではあったが、仕方が無い。と諦めを呟く
晴海が帰っていったのを見送った若葉と夏凜は、少しだけやっていくか。とどちらからでもない提案を呑んで、刀と刀をぶつけ合う
「やるじゃない、若葉。教導官の武器破壊なんて」
「あんなのは偶然の産物だ……防戦一方でしかなかった」
攻めに転じたはずなのに、瞬く間にもひっくり返されていた戦いを思い返して、若葉は歯を食いしばって刀を振るう。風を切ったそれは夏凜の肉薄を許し、胸元への一撃が打ち込まれて、よろめく
「だが……あれは良い相手だった」
そのまま砂場へと倒れこんだ若葉は、自分の震える手を見つめて小さく笑う。あの頃から大分劣った。記憶をなくし、与えられただけという差が、きっと体をまだ寝ぼけさせたままなのだ
本調子にもなれば、きっと、善戦とは行かなくても接戦できるはずだ。いや、そうでなければいけないのだと、若葉は握りこぶしを作って。その手に、夏凜の拳がぶつかる
「打倒、教導官」
「ふふっ……夏凜も意外と子供っぽいのだな」
「ちっ、違うっての！ 負けっぱなしは気に食わないし……それに。強くなりたいからよ」
照れ隠しに怒鳴りながらも、筋が通っていそうな力強い意志の篭った瞳を見せる夏凜に、若葉は笑みを見せて、「よろしく頼む」と、拳を打ち合わせる
強くなりたい理由があるのだ。守りたいものがあるのだ。負けられない戦いがあるのだ。だから。夏凜と若葉は、切磋琢磨し精進することを誓う。願いは二人で一つ。

若葉は、主の望む世界を守るために。
夏凜は、恋人の望む世界である為に。